

## グラフィック・メディスンへの期待 ～マンガの力とコミュニケーションギャップ～

日本病院薬剤師会理事  
住友ビルディング診療所薬局  
丹下 悦子 Etsuko TANGE



この度、令和6年度診療所委員会委員長および理事を拝命致しました丹下悦子と申します。診療所委員会委員を4期、大阪府病院薬剤師会の診療所委員会と後継の患者支援推進委員会の委員長などを約20年担った経験から、診療所会員のために尽力していく所存です。

さて、新年度も明けて、新緑の爽やかな季節がやってきました。新天地での業務、新年度からの業務変更や人手不足による業務量過多など、あらゆる立場で、ざわつく心をもて余す季節でもあります。外に目を向けても、院内/外の医療チームとの協働や、限られたマンパワーでのシステム構築など、目前の課題に吐息する場面も多いかもしれません。何よりも、薬剤師は職能からも悩ましい対話も多く、医療従事者同士に対しても、患者に対しても、コミュニケーションを醸成していきたいと、普段から関心をもたれておられる方は多いのではないのでしょうか？

先日、ふとしたことから、マンガを活用した医療に関するコミュニケーションギャップの改善を目的に、患者や医療従事者が体験したエピソードに基づいて「視点の違い」を描く「医療マンガ大賞」（横浜市医療局主催）の記事に触れる機会がありました<sup>\*</sup>。患者と医療従事者では、同じ出来事でも、受け取り方や感じ方が異なることに着目し、各々の視点からの捉え方をマンガ化することで、視点の違いに互いに気づき、共感を促進することを目指されているそうです。これは、「グラフィック・メディスン」という2007年にイギリスのイアン・ウィリアムズを中心に、コミックス表現が医療領域をどのように扱うことができるかを、包括的に探索されてきた概念の応用だそうです。これがさらに、マンガのもつストーリーに沿って感情移入しやすい特徴から、コミュニケーションギャップの改善に、ヘルスケアコミュニケーションツールとする試みに、発展してきた経緯があるそうです。そして、医療従事者だけでなく、患者、介護者、研究者、表現者、さらには社会全体にとって、医療や健康をより身近で、対話可能なものにするためのアプローチとして、国際的な交流も広がってきているそうです。

さて、皆様方の多くも、子供の頃からマンガを楽しみつつ、学びにも活用されてきたのではないのでしょうか？そして、昨今は、薬剤師もマンガの主人公に登場する機会も増えてきました。私たち薬剤師同士はもちろん、他医療従事者に対しても、患者に対しても、視点の違いから対話の負担感に繋がった経験は誰にもあると思います。薬剤師にとっても、well-being（精神的にも、身体的にも、社会的にも満ち足りた状態）な働き方が注目されていますが、well-beingを妨げるコミュニケーション不全に対して、予防的（教育的）で共感的なコミュニケーションツールには、期待と高い関心をもって、今後を見守りたいと思います。

<sup>\*</sup>：「医療マンガ大賞」ホームページ：<https://medical-manga.comici.jp>